

クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2017 渡部泰明

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



朝日講座 〈偶然〉という回路

偶然と日本古典文学

課題

序詞を用いた和歌（短歌）を作り、批評しなさい。
ただし、現代語のみ、あるいは現代語が混じっていてもかまわない。

序詞（じょことば・じょし）

和歌の修辞の一つ。二句もしくは七音節以上から成り、和歌中のある言葉（主想部・本旨）を導き出す働きをする語句。

- ・ 上句など一首の前半に置かれることが多い。
- ・ 序詞は景物を主とする表現である。
- ・ 主想部は心情を主とする表現である。

序詞と本旨の関係には、形式上次の三種がある。

①類音の繰り返しに基づく

②比喩に基づく

③掛詞に基づく

①類音の繰り返しに基づく

ほととぎす鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな
(古今集・恋一・四六九・よみ人知らず)

浅茅生の小野のしの原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき
(百人一首・源等)

②比喩に基づく

我が袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわくまもなし
(百人一首・二条院讃岐)

③掛詞に基づく

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を独りかも寝む
(百人一首・柿本人麿)

問題点

②の比喻に基づく序詞はまだしも、①や③の序詞は、同音という、言葉の偶然の関係にすぎている、無駄なものにも思える。内的な必然性よりも外的な偶然性によって言葉が選ばれているとしか思えない。

自己表現である詩において、なぜこうした表現を用いるのか？

現代短歌の序詞的表現

くろ髪の手すぢの髪のみだれ髪かつおもひみだれおもひみだるる
(与謝野晶子『みだれ髪』1901)

大工町寺町米町仏町老母買ふ町あらずやつばめよ
(寺山修司『寺山修司青春歌集』1972 角川書店)

サバナの象のうんこよ聞いてくれだるいせつないこわいさみしい
(穂村弘『シンジケート』1990 沖積舎)

作業 1

実体験に基づく心情表現を主として、下の句（七音・七音）を作れ。

（用紙を縦に半分に折り、左側に縦書きにすること）

例

- 恋は悲しきものにぞありける
- 足を踏まれてチヨ一腹が立つ

作業 2

手元の下句に序詞（五音・七音・五音）の上句を加えて、一首を完成させよ。その際、「東大」に関する語句を必ず入れること。

（右半分に縦書き）

作業 3

グループごとに代表作を選出し、作品鑑賞とともに発表する。

問題点への視角

和歌は境界的な文芸であり、創作者と享受者が重なっている。従って、和歌は享受に際しても、創作者の身になって味わう、当事者的な感覚が不可欠である。

音の共通性・類似性を生かした「枕詞」「序詞」「掛詞」「縁語」などの和歌の修辞は、たしかに偶然性に依存しているが、それは音という空間的な共時性を喚起し、時と場——これを「折」という——を同じくしている感覚を惹起する。それとともに、わが「心」が、定型という枠組みに助けられて、一種運命的な力によって定められたようなムードを与える。「信仰」と呼んでもよさそうな共同性が生まれるのである。

修辞が和歌を形成する大きな要素であることを考慮するなら、大げさに言えば、和歌が日本の歴史を貫いて重用された理由の一端も、そこに求めることができる。

参考文献

渡部泰明『和歌とは何か』（岩波新書、2009）

山中桂一『和歌の詩学』（大修館書店、2003）

鈴木日出男『古代和歌の世界』（ちくま新書、1999）